長岡京市文化財調査報告書第25冊

史跡　恵解山古墳

1990

長岡京市教育委員会

はじめに

恵解山古墳は、本市で最大の規模を誇る古墳時代中期に造られた前方後円墳です。これまでの発掘調査により、葺石と埴輪、それに副葬品の埋納施設が確認され、そこから出土した700点近くもの鉄製品は、全国的にも希有なものとして大きな反響を呼びました。そして、関係者ならびに関係機関のご尽力により、周濠を含めた約20000m²が昭和56年10月13日付で国の史跡に指定を受け、後世に保存されることになりました。その後、本市では、昭和56年度より用地の買収を進めると共に、説明板の設置など保存に向けて取組んでおります。

本書は、恵解山古墳のことを広く知っていただくことを願って作成したものです。そして、本書が長岡京市の古代史を紐解く資料として活用していただくことを期待しております。

平成２年３月31日

長岡京市教育委員会
教育長　中小路　脩

目次

１．位置と環境……1
２．調査と保存の歩み……3
３．墳丘と外表施設……4
４．埋葬施設……7
５．副葬品の埋納施設……8
６．副葬された鉄製品……10
７．恵解山古墳とその時代……12

例言

１．本書は、恵解山古墳から多量の鉄製品が発掘されて10周年目にあたり、市民に古墳の内容を広く知っていただくために作成したものです。

２．本書に掲載した写真の大半は、高橋猪之介氏が撮影したものです。

３．本書の編集は、(財)長岡京市埋蔵文化財センターが行い、白川成明と千喜良淳両氏の協力を得て山本輝雄が執筆しました。

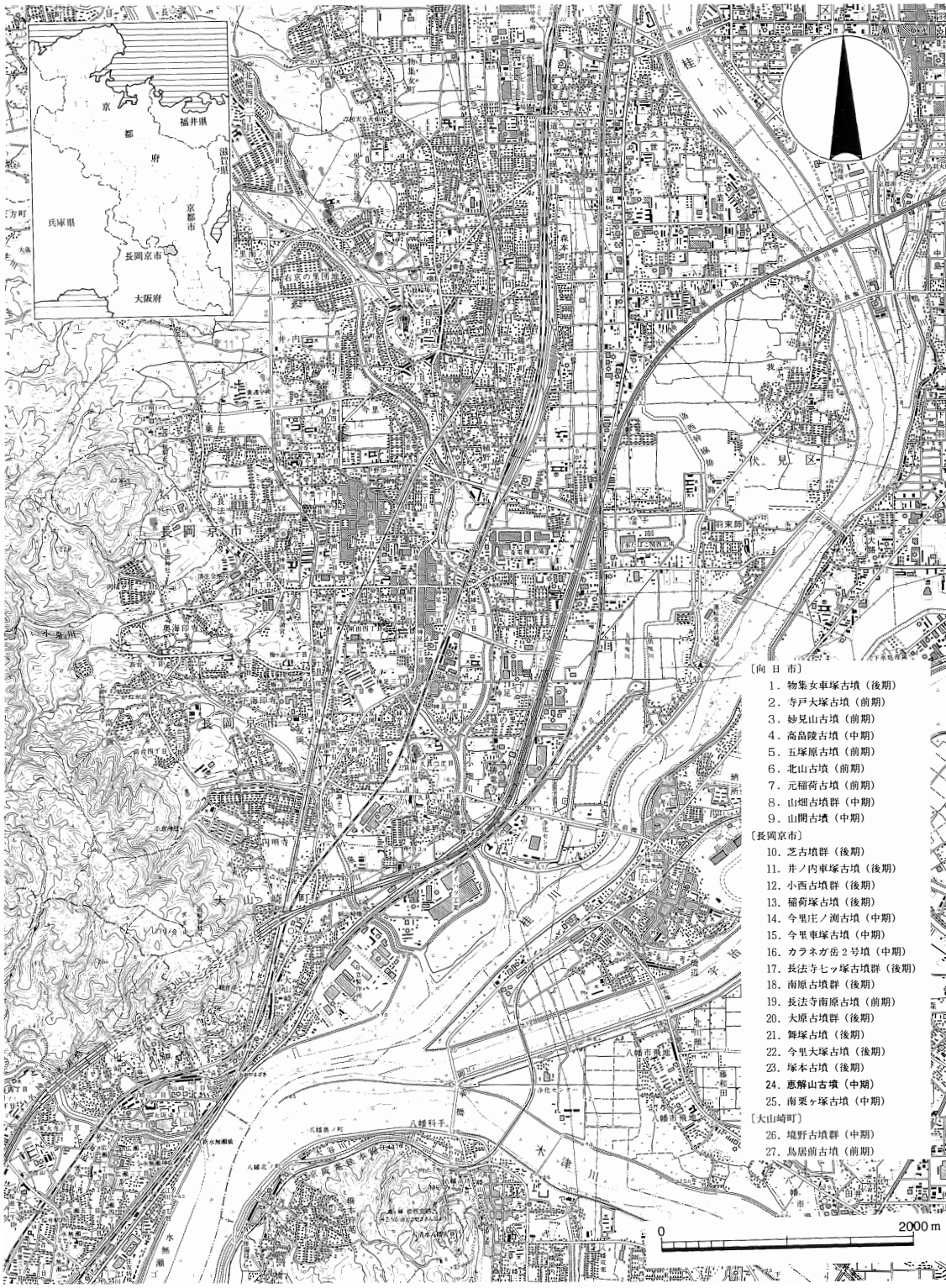
表紙：南東上空から見た恵解山古墳　　裏表紙：北から見た副葬品の埋納施設

1　位置と環境

恵解山古墳は、JR長岡京駅の南方約1㎞、京都府長岡京市の勝竜寺から久貝2丁目にかけて所在しています。長岡京市が位置する桂川の西岸は、京都盆地の西南部にあたり、古来より乙訓(弟国)と呼ばれてきました。乙訓地域では、西山山地から延びる丘陵と段丘、それに桂川や小畑川によって形成された肥沃な平野などの恵まれた自然環境が、太古の昔から人々の生活のより所になってきました。特にこの地域は、継体天皇の弟国宮の伝承や桓武天皇による長岡京の造営など、政治の中心地として歴史の表舞台にたびたび登場していますが、その土台がすでに古墳時代に成立しつつあったことは、全国的にみても著名な古墳が数多く分布していることでわかります。山城では最古の段階に位置付けられる元稲荷古墳（前方後方墳・94m）をはじめ、寺戸大塚古墳（前方後円墳・98m）、妙見山古墳（前方後円墳・115m）、長法寺南原古墳（前方後方墳・60m）などの前期古墳、中期古墳としては今里車塚古墳（前方後円墳・74.4m）と高畠陵古墳（円墳・60m）、そして物集女車塚古墳（前方後円墳・48m）や今里大塚古墳（円墳・45m）などの後期古墳が知られ、そのうち恵解山古墳は中期の代表格といえます。

古墳は、犬川沿いに形成された段丘の末端付近に築かれています。標高が16m前後とかなり低地に立地していますが、桂川、宇治川、木津川の3河川が合流して淀川に注ぐ地点に近いことから、交通の要衝を意識して造られていると考えられます。また、古墳のすぐ南東では、一辺約17mの小方墳である南栗ケ塚古墳が発掘されていて、大型の前方後円墳と周辺の小型古墳との関係を考える上で興味深いものといえます。

▲空から見た恵解山古墳



▲恵解山古墳の位置と周辺の古墳分布図

2　調査と保存の歩み

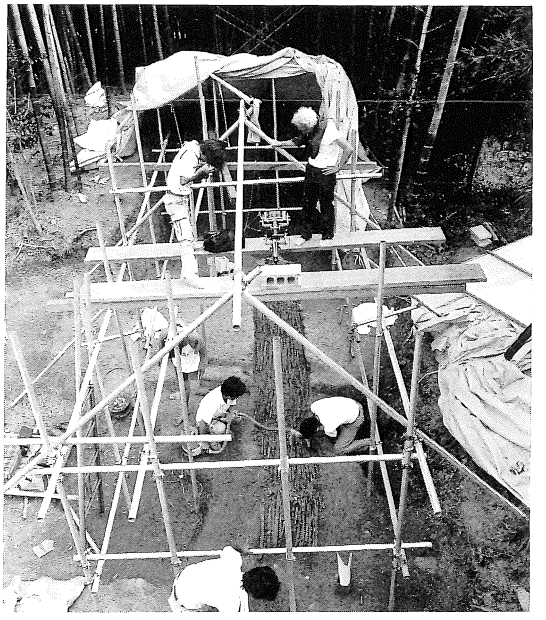
恵解山古墳のことを初めて世に紹介したのは梅原末治氏です。梅原氏は、大正13（1924）年に古墳を訪れ、全長が100ｍを超える前方後円墳で、葺石と埴輪をもち、埋葬施設が竪穴式石室であることを翌年に発行された京都府の報告書に略述しています。しかしながら、梅原氏が「府下における顕著なる古墳」と述べたにもかかわらず、ほとんど注目されることはなく、調査や研究の対象になることもありませんでした。

それから43年を経た昭和42（1967）年に、京都府教育委員会が分布調査を行い、周濠の存在が新たに確認されると共に、墳丘の測量図を作成しました。その成果は、京都府の報告書や遺跡地図などに掲載され、周知の遺跡としてようやく世間にも広く知られるようになりました。

その後、のどかな田園地帯であった周辺の環境は急速に変化し、開発の波は古墳にまで押寄せました。昭和50（1975）年には道路の新設工事に伴う第１次調査が、また昭和51（1976）年にはグラウンド敷設工事に伴う第２次調査が行われ、後円部の葺石や周濠内の状況が明らかになりました。さらに昭和54（1979）年、周濠部分での開発が計画されたのを契機として、長岡京市は恒久的な保存に向けての方針を決定しました。ところが、昭和55（1980）年に墓地の拡張工事が行われ、多量の鉄製品が出土したことから第３次調査を実施しました。その結果、副葬品の埋納施設を確認し、古墳の評価をより一層高める成果を収めました。こうした経緯と関係者の尽力により、昭和56（1981）年10月13日、本市では初めて国の史跡に指定され、後世に保存されることになったのです。

▲昭和49（1974）年頃の墳丘

▲後円部の葺石（第２次調査）



▲副葬品埋納施設の写真撮影（第３次調査）

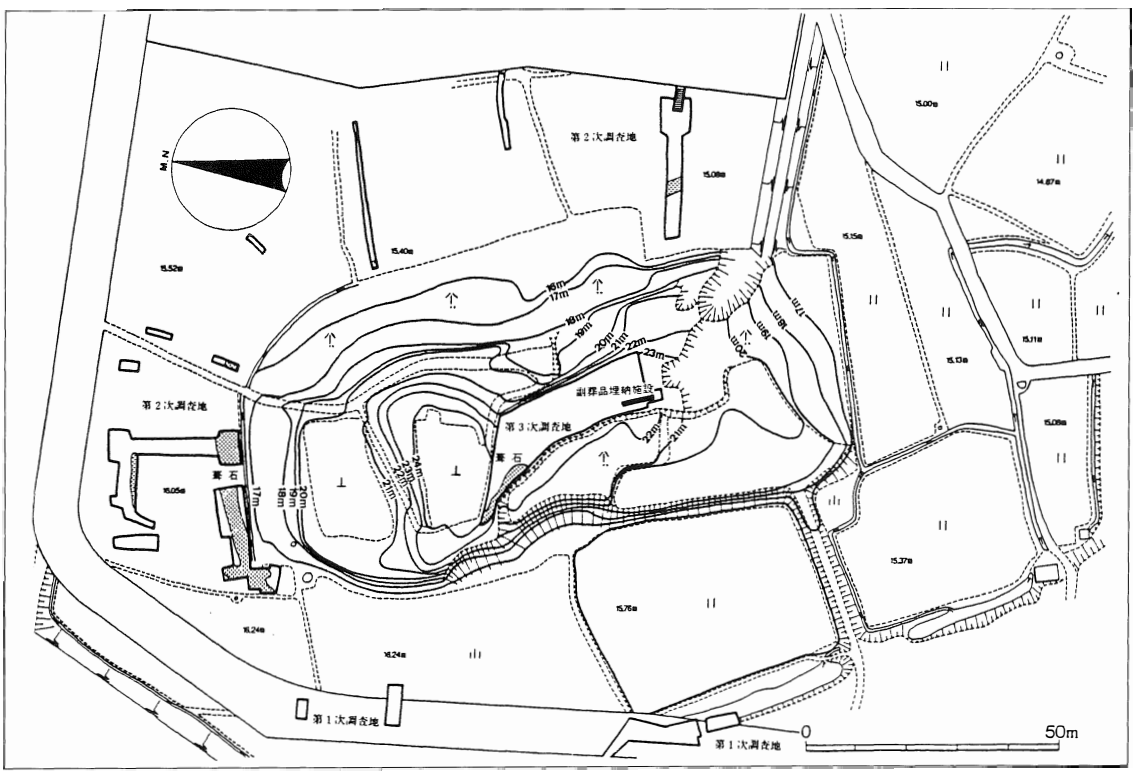
3　墳丘と外表施設

古墳の墳形は、前方部を南東に向けた前方後円墳で、現在墳丘は勝竜寺の区有墓地、畑地や竹藪などに利用されています。その規模は、全長約120ｍ、後円部の径約60ｍ、高さ約８ｍ、前方部の幅約55ｍ、高さ約6.5ｍを測り、乙訓地域では最大、京都府下でも有数の規模を誇っています。墳丘は、長い歳月の間にかなり変形を受けていますが、自然地形を利用しながら土を盛って構築しているようです。そして、前方部および後円部ともに三段に築成されていると推察できます。

古墳の表面には、人頭大から拳大ほどの河原石を用いて葺石を施しています。葺石は、雑然と葺かれたのではなく、いくつかの単位に区画しながら施工されたことが確認できました。葺石の石材には、砂岩、チャート、粘板岩などがあり、古墳の南西約900ｍの所を流れる小泉川で採集した河原石を主に用いていることが解明されています。なぜ、近くの小畑川や犬川からでないのか、疑問の残るところですが、被葬者の勢力範囲を知る上で興味深いものといえます。

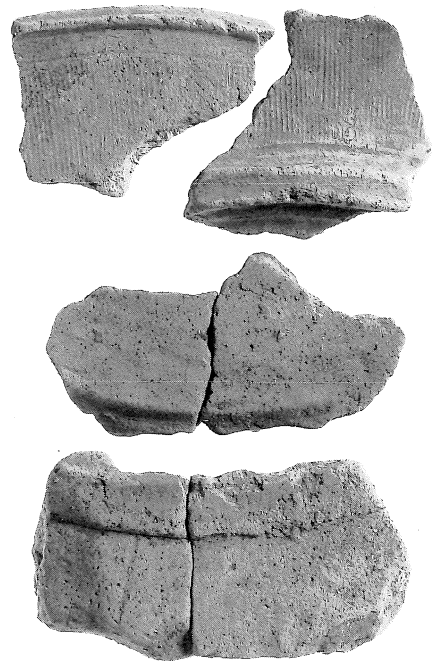
また、墳丘の各所から埴輪の破片が出土しているので、墳頂部や段築の平坦面には数多くの埴輪を巡らしていたと推察されます。埴輪は、これまでのところ円筒、朝顔形、家形、蓋形などが確認されていて、古墳が造られた年代を知る一つの手掛かりを与えてくれます。

古墳の周囲には、幅約30ｍほどもある盾形をした周濠を巡らせていて、外部と区画する役目を果たすと共に、掘り上げた土砂は墳丘の盛土に利用されたと考えられます。

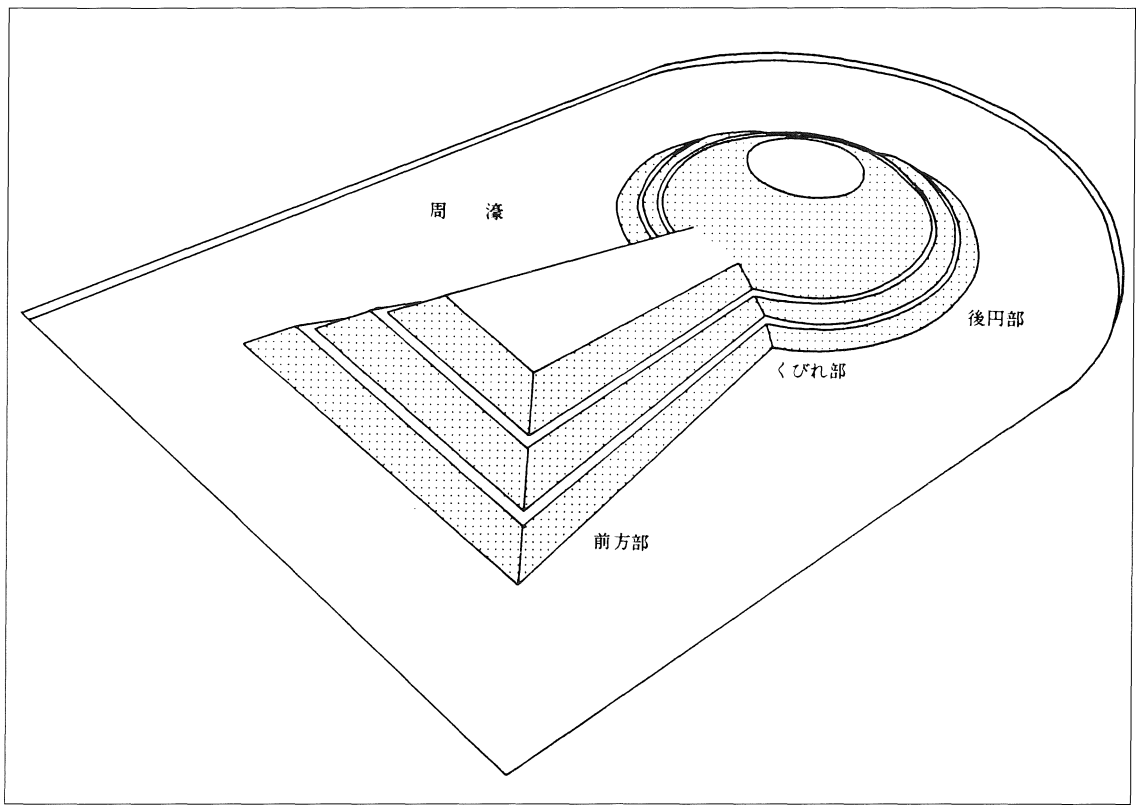


▲墳丘の測量図と調査地点

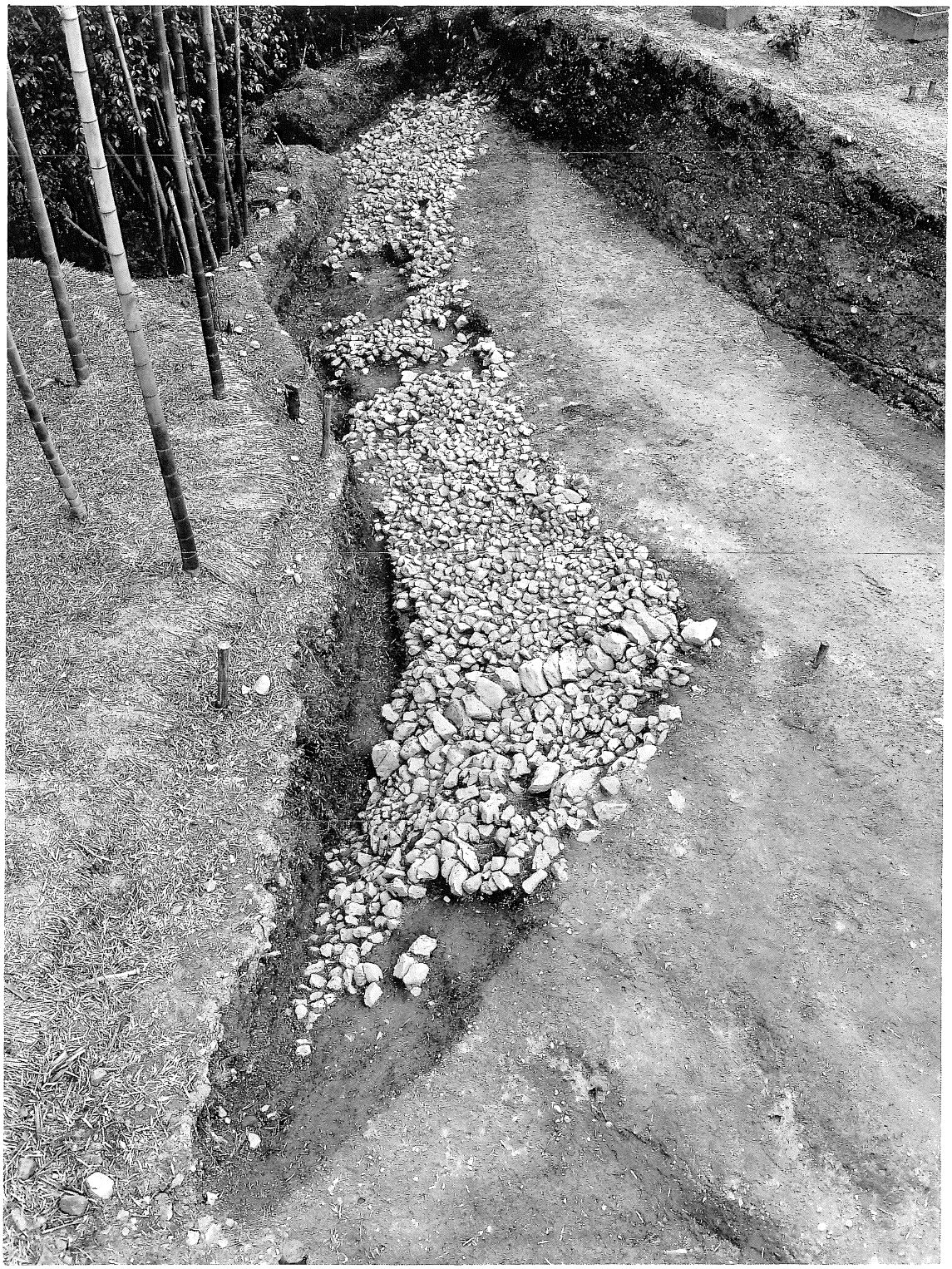
▲前方部東側の周濠



▲朝顔形埴輪と蓋形埴輪



▲恵解山古墳の復元図

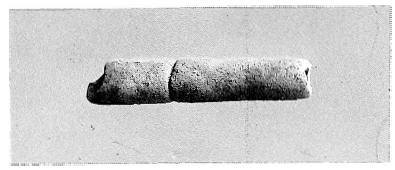


▲くびれ部の葺石

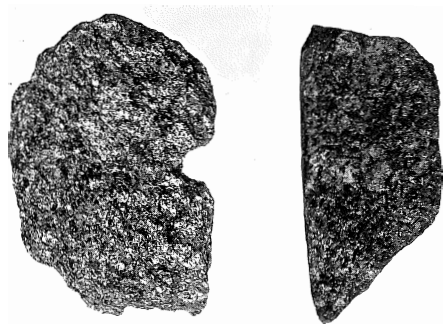
4　埋葬施設

埋葬施設については、梅原氏がかつて後円部に竪穴式石室が存在し、今は散逸した５枚の天井石の大きさから、長さ約3.6ｍ、幅約1.8ｍという石室の規模を復元されているのみでした。ところが、第２・３次調査でこの付近には全く存在しない板状の結晶片岩と安山岩が十数点、それに碧玉製の管玉が１点出土したことで、これまで不明な点の多かった石室や副葬品の内容を知る手掛かりが得られました。というのは、結晶片岩は和歌山県の紀ノ川や四国の吉野川流域が主な産出地であって、近畿地方に分布する前期および中期古墳の竪穴式石室などに使用されていることが知られています。このことを考慮すれば、恵解山古墳の石室にも紀ノ川などの遠隔地から運び込まれた石材が使用された確率が高く、とすれば乙訓地域で最初に結晶片岩を導入した古墳として注目されます。

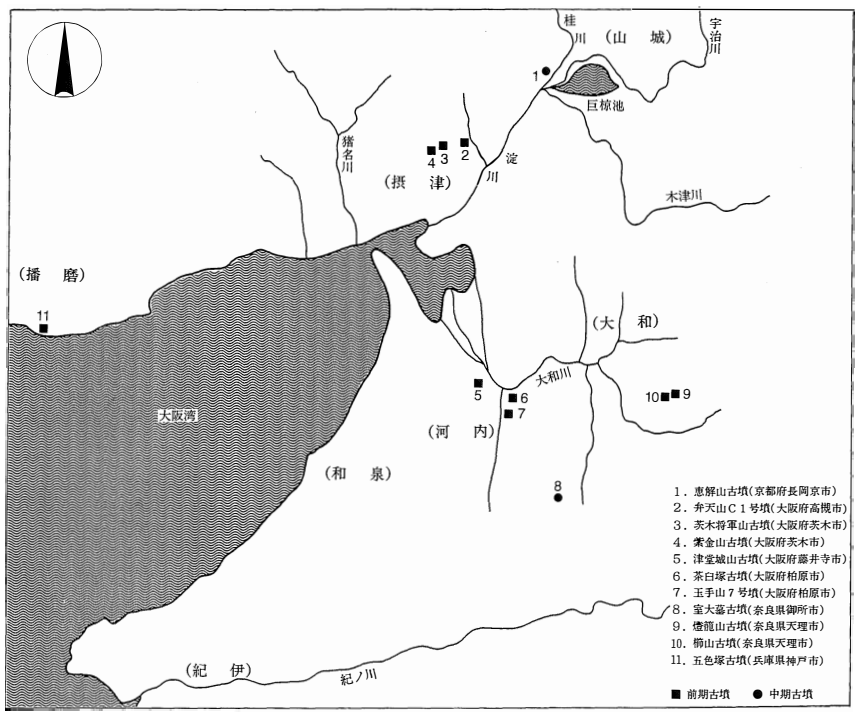
また、碧玉製の管玉は、すでに破壊されてしまった竪穴式石室に伴う副葬品である可能性が強いといえるでしょう。



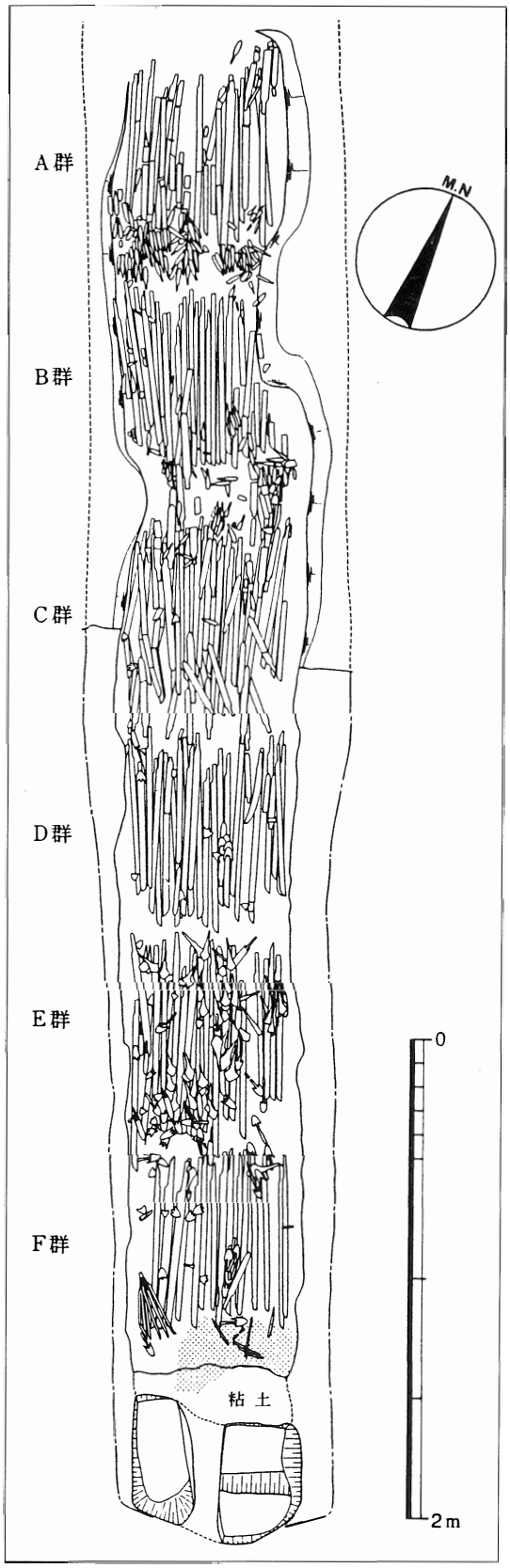
▲碧玉製管玉



▲出土した結晶片岩



▲結晶片岩を使用する古墳の分布図



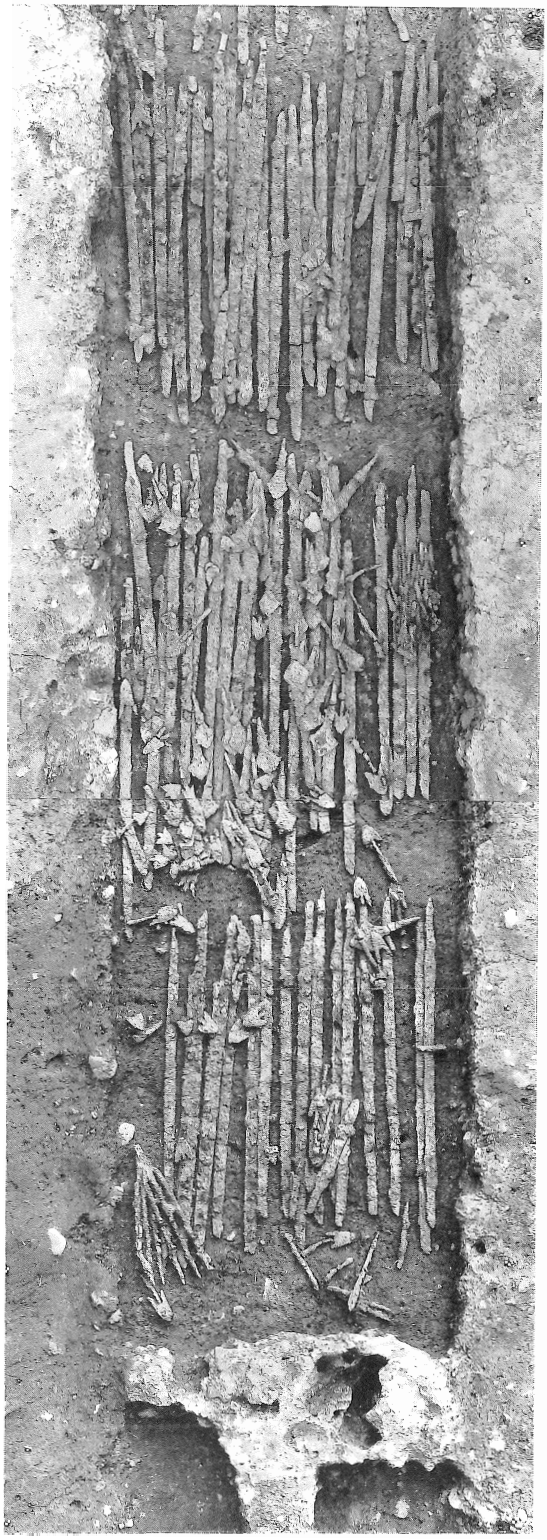
◀副葬品埋納施設の実測図

5　副葬品の埋納施設

恵解山古墳には、後円部の石室以外にも別個の施設が確認されています。それは、前方部のほぼ中央に安置された副葬品用の埋納施設であって、遺体を埋葬するためのものではありません。この施設は、北半部が墓地の造成工事で損壊を被りましたが、遺存の度合が良好な南半部の状況から判断すると、おそらく木製の板材を組合わせた木櫃（もくひつ）のような構造で、南北両端に粘土を置いて固定したものと推察されます。その規模は、幅約0.9m、長さ6.5mほどに復元できる長大なものです。

施設内には、多量の鉄製品を上下2層に積み重ねて埋納していました。それらの配置状況をみると、まず下層には数十点を一組にした鉄刀（てっとう）と鉄剣（てっけん）を大きく6群（北からA…F群）に分け並べていますが、南に向かうほど徐々にその数量を減じる傾向があります。各群の刀剣類は、それぞれ重なることなく配列されていて、切（き）っ先（さき）はすべて南を向けていました。一方、上層には鉄鏃（てつぞく）、短剣（たんけん）、短刀（たん とう）、ヤス状鉄製品などを配していますが、北半部（A～C群）と南半部（D～F群）とでは鉄製品の種類や数量、それに配置の状況が異なっていました。北半部では、柳葉（やないば）形の鉄鏃を束にしたかのようにまとめて置き、またC群上には切っ先を北に向けた短剣を並べていました。南半部では、北半部と異なる様々な形態の鉄鏃を雑然とした状態で載せ、D群上には短剣と短刀、F群上にはヤス状鉄製品などを配しています。このように配列された鉄製品を見ると、まさに当時の武器庫をそのまま移設したかのように思われてなりません。

なお、蕨手刀子（わらびてとうす）の明確な出土位置は不明ですが、北半部にあったことだけは確かなようです。



▲副葬品埋納施設の南半部

▲副葬品埋納施設の北半部

6　副葬された鉄製品

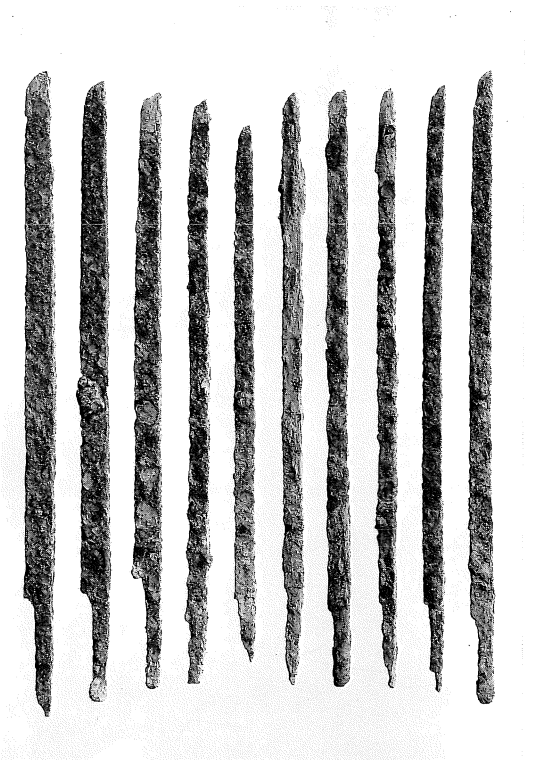
前方部の副葬品埋納施設からは、総数700点近くにも及ぶ鉄製品が出土しています。これほど大量の鉄製品を保有する古墳は、京都府下はもとより全国的にみても非常に珍しいもので、当古墳を一躍有名にしました。鉄製品の大半は、攻撃用の武器類であって、甲冑などの武具や農工具類をほとんど含まないことが特徴といえます。いずれも長い年月の間に赤茶色に錆びて、もろくなっているものも少なくありません。それらの種類とおおよその数量は次のとおりです。

鉄刀……146点
短刀……1点
鉄剣……11点
短剣……52点
ヤス状鉄製品……5点
鉄鏃……472点
蕨手刀子……10点

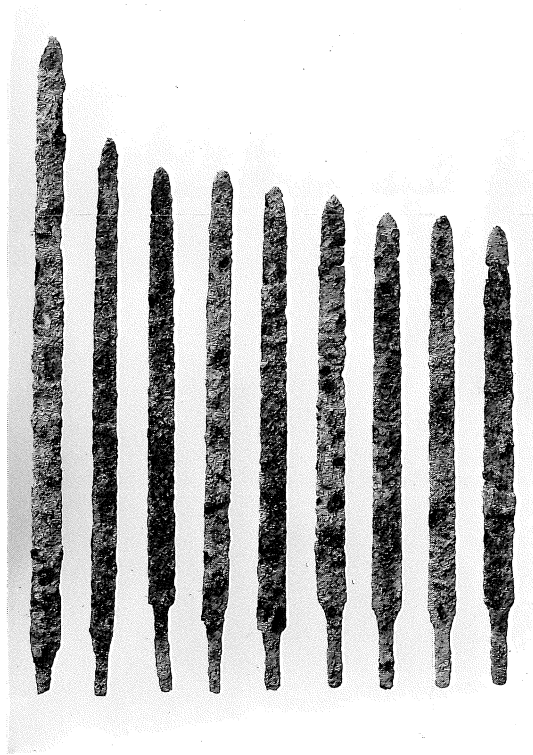
鉄刀は、すべて刀身が反りをもたない直刀で、表面に木質が残ることから、木の鞘に収められていたようです。長さ56～79cm、幅1.9～3.1cmと細くて短いのが特徴で、大阪府のアリ山古墳や野中古墳から出土した鉄刀と比較すれば一目瞭然です。このため、はたして実用品として威力を発揮できたのかどうか疑問であって、儀式用に作られたものかもしれません。

短刀は、鉄刀の約半分の長さ（約31.6cm）しかありませんが、刀身は反りをもっています。

刀類が片刃であるのに対して、鉄剣は両刃をもつ刺突用の武器です。長いもので約74cm、短いもので約52cmほどあります。



▲鉄刀（右・長さ72.1cm）



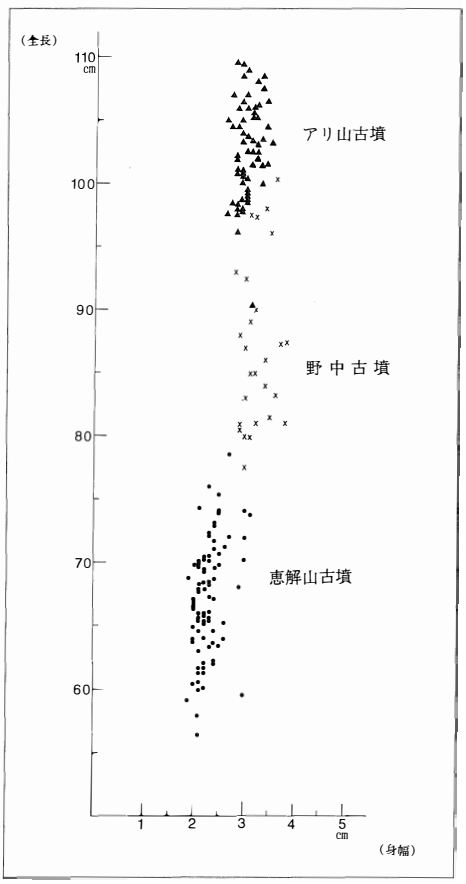
▲鉄剣（右・長さ52.1cm）

短剣は、鉄剣に比べると短い（21～33cm）ものですが、形態の差異はほとんどありません。

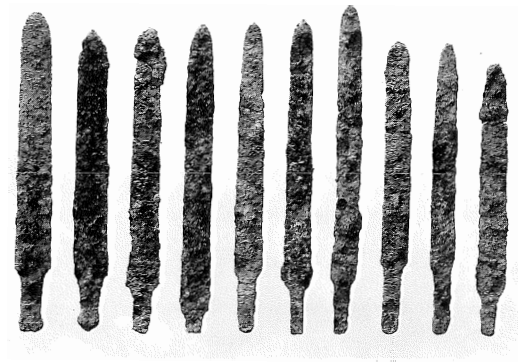
ヤス状鉄製品は、長さ30cm前後と17cm前後の大小があって、すべて逆刺をもつ三ツ又の刺突部をもっています。漁具というよりは、むしろ武器として使用された可能性が強いように思われます。

鉄鏃は、矢の先端につけて弓で射る攻撃用の武器です。鏃の形態は、柳葉形や三角形、それに圭頭形など各種のものがあり、大きさも様々です。そのうち、柳葉形の鏃が全体の約７割を占めていますが、三角形や圭頭形の鏃には、鏃身に穴を開けたり茎に捩りを加えるなど、手の込んだ作りをしたものがあります。

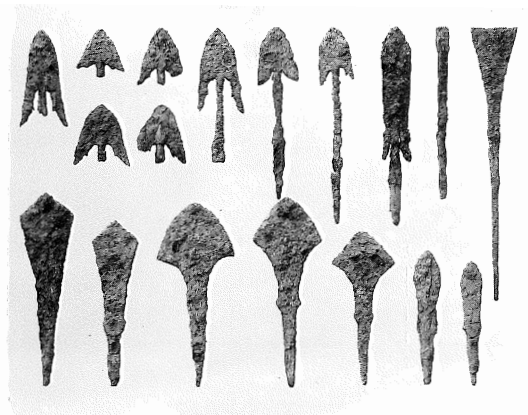
蕨手刀子は、柄と刃を一体に作った小刀で、柄頭が蕨の巻いた状態に似た形をしています。



◀鉄刀の大きさ比較

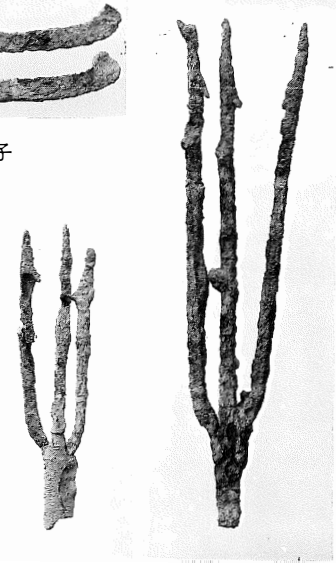


▲短剣（右・長さ27.8cm）



▲鉄鏃（右上・長さ21.9cm）

▲蕨手刀子

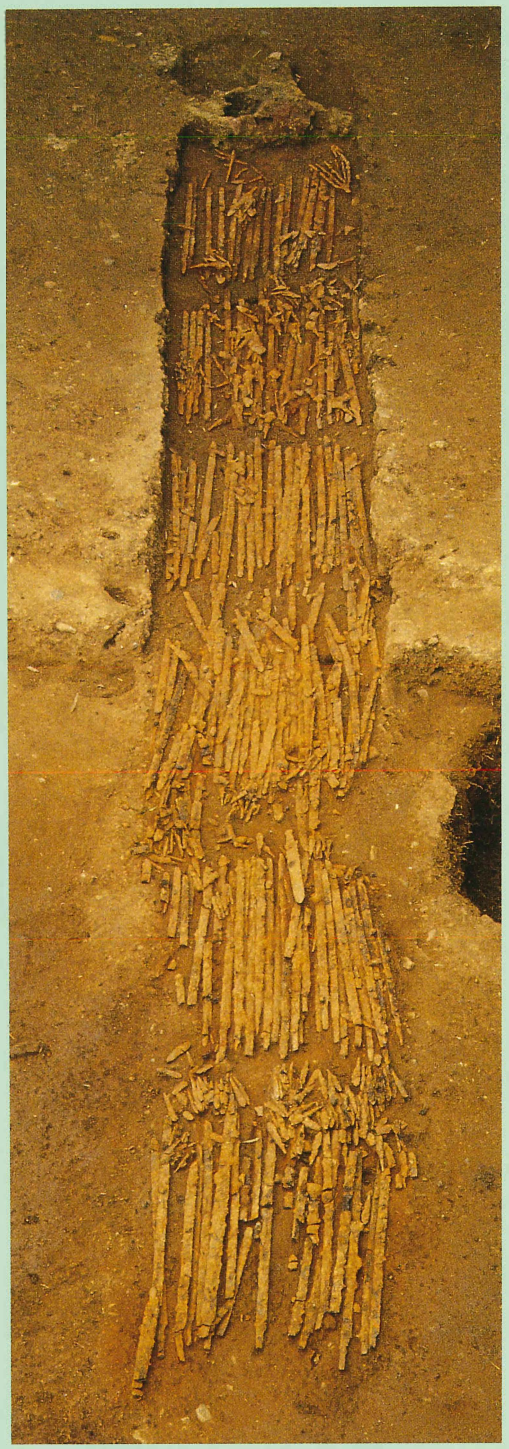


▲ヤス状鉄製品（右・長さ30.4cm）

▲短刀

7　恵解山古墳とその時代

恵解山古墳は、墳形および埴輪や鉄製品の特徴などから古墳時代の中期、西暦になおすと5世紀の前半頃に造られた古墳と考えられます。この時期は、中国の歴史書（『宋書倭国伝』）によれば、「倭の五王」と呼ばれた大王を中心とする勢力が武力でもって支配の範囲を広げつつあった時期にあたります。また、古墳の規模が巨大化すると共に、副葬品の内容も鉄製の武器や武具などが飛躍的に増加する傾向が知られています。特に、大阪平野の古市古墳群や百舌鳥古墳群、それに奈良盆地の佐紀古墳群や馬見古墳群では、200m以上もある大型の古墳が数多く造られていて、その中には大仙古墳（伝仁徳陵）や誉田山古墳（伝応神陵）など大王墓と考えられている巨大古墳が含まれています。さらに、古市古墳群中の西墓山古墳、アリ山古墳、野中古墳、盾塚古墳、百舌鳥古墳群中の堺大塚山古墳、七観古墳など中・小規模の古墳では、多量の鉄製品を副葬した埋納施設が確認されていて、蓄積された鉄製品の数量はかなりのものであったと想像できます。このようにみてくると、恵解山古墳は決して大きな古墳とはいえませんが、鉄製品を多量に埋納した施設が存在するなど、河内や和泉など近畿の中心部に分布する古墳の様相と極めて類似しており、大王の勢力と密接な関係をもっていたことがわかります。恵解山古墳に葬られた人の氏名まではわかりませんが、おそらくそれらの勢力を背景にして乙訓地域を統括し、支配することのできた乙訓の王ともいえる人物だったに相違ありません。

古墳名	所在地	墳形（規模）	埋葬施設	副葬品埋納施設	埋納施設の副葬品
恵解山古墳	京都府長岡京市	前方後円墳（120m）	竪穴式石室	木櫃	鉄刀146、短刀1、鉄剣11、短剣52、鉄鏃472、ヤス状鉄製品5、蕨手刀子10
黒姫山古墳	大阪府美原町	前方後円墳（116m）	石棺？	竪穴式石室	短甲24、冑24、頚甲11、肩甲12、草摺4
アリ山古墳	大阪府藤井寺市	方墳（45m）	木棺	木箱	鉄刀77、鉄剣8、鉄槍8、鉄矛1、鉄鏃1542、鉄鎌201、鉄斧134、鉄鍬49、鉄鉋18、鉄錐1、鉄鑿90、鉄鋸7、蕨手刀子151、鉤状鉄器412、土製丸玉11
野中古墳	大阪府藤井寺市	方墳（34m）	木棺	木櫃4	短甲10、冑10、草摺1、鉄刀154、鉄剣16、鉄矛3、鉄鏃115、鉄鍬11以上、鉄鋤4以上、鉄鎌2、手鎌35、鉄斧30、鉄鑿4、鉄錐7、鉄鋌129以上
西墓山古墳	大阪府藤井寺市	方墳（18m）	なし	木櫃2	鉄刀、鉄剣、短剣、鉄槍、鉄鍬、鉄鎌、手鎌、鉄斧、鉄鑿、鉄錐、鉄鉋刀子、石製模造品
盾塚古墳	大阪府藤井寺市	前方後円墳（64m）	粘土槨	粘土槨	鉄刀40、鉄剣15、鉄矛6、鉄鍬4、鉄鎌2、鉄斧20
土保山古墳	大阪府高槻市	円墳（30m）	竪穴式石室	粘土槨	鉄鏃100以上、弓6、靫4、冑1、肩甲2、草摺2、鉄鎌1
七観古墳	大阪府堺市	円墳（50m）	不明	粘土槨2	環頭大刀、鉄刀、鉄剣、鉄矛、鉄鏃、馬具、石製勾玉
堺大塚山古墳	大阪府堺市	前方後円墳（168m）	粘土槨2	粘土槨5	鉄刀、鉄剣、鉄矛、鉄鏃、短甲、冑、草摺、盾、鉄斧、刀子、鉄鑿
大和6号墳	奈良県奈良市	円墳（25m）	なし	粘土槨	鉄鏃9、鉄鋌872、鉄鎌134、鉄鍬179、鉄斧102、刀子289、石製模造品

▲近畿地方の副葬品埋納施設をもつ中期古墳